

■佐伯矩 栄養学者。世界で最初の栄養研究所を創設し、日本独自の栄養学を開拓、国家的栄養基準を主導した。

さえきただす

三つの内乱・1876＝ 愛媛県周桑郡小松町に生まれる。

明治14年政変1881＝ 5歳：

内閣発足・・・1885＝ 9歳：

帝国憲法発布1889＝13歳：

日清戦争始・1894＝18歳： 県立松山中学を経て、
第三高等学校医学部に学び、生化学に興味を持って荒木寅三郎に指導を受け、在学中に研究成果も発表。

子規句歌革新1898＝22歳：卒業。
Bushidou・・・1899＝23歳：新設の京大生科学の初代教授に抜擢された荒木に従って京都に移って指導を受け、荒木の紹介で上京して
伝染病研究所に入り、北里柴三郎の指導を受けて細菌学や毒物学を学ぶ。

教科書疑獄・1902＝25歳：ラファヌス=ディアスターゼを発見し、
日比谷公園・1903＝27歳：牡蠣のグリコーゲンや脚気患者の代謝に関する研究などを行う。
日露戦争終・1905＝29歳：推薦によってアメリカのエル大学に留学。アメリカ医化学会の創始者で学長のチッテンデンに入門し、
医化学や生理学などの研究に従事。

ドクトル=オブ=フィロゾフィーの学位を受け、
アメリカ農商務省技師やアルバーニー医科大講師として勤務、

大逆事件判決1911＝35歳：アメリカを去り、イギリス・ベルギー・フランス・ドイツなどヨーロッパの各地を歴訪して、帰国。
明治天皇没・1912＝36歳：*日本の学位を受け、大根ディアスターゼの論文は夏目漱石「吾輩は猫である」に引用され、「家庭医学双書」
にも記載されて大根の食品としての評価が高まる。帰国した当時、結核や脚気などで多くの若者が亡くなっ
ていたことから、栄養学的重要性を強く認識し、総合的な研究と、栄養学の独立を目指すことを決意。

第一次大戦始1914＝38歳：東京芝白金に私立で、*世界で最初の栄養研究所を創設。
民本主義・・・1916＝40歳：研究所を芝金杉に移して拡充。
診療所も併設し、新しい栄養療法を実施。また日本で初めての栄養講習会を開催。“栄養”という言葉をも
“栄養”に改訂するように提言し、“偏食”“栄養食”“栄養効率”“栄養指導”などの用語も作り、次第に一般に用い
られるようになる。さらに学童の栄養と社会の食生活改善のための“学校給食”の確立を提唱し、
単なる救済や慈善事業ではなく保健向上の目的とした“学校給食”が東京銀座の小学校で、
都下の十数校で実施される。

早くから国立栄養研究所の必要性を強調し、衆議院に参考資料を提出するなどしてきたが、内務省は栄養
研究が国の急務であることを認め、多くの関係者の支援もあって、
*ようやく建議案が国会を通過、国立栄養研究所が開設されて、初代の所長に任命される。

大暴落・・・1920＝44歳
原敬首相暗殺1921＝45歳：来日した国際連盟衛生委員が研究所を見学、ロックフェラー財団の派遣員が業績を称賛したことから、
専門職である栄養士の必要性を痛感し、養成について再三国に要望するも、実現に至らなかったため、
以前の私立栄養研究所の跡地に、世界で最初の栄養学校を開校し、卒業生を栄養士と称した。

護憲三派圧勝1924＝48歳：日本人初の国連交換教授としてパリ大学に招待され、ヨーロッパ・南北アメリカ各地で講演を行い、
円本時代始・1926＝50歳：帰国。ビタミンの標準の統一と国際単位を決定も国連に提案、今日のビタミン国際単位制の基礎となる。
金融恐慌・・・1927＝51歳
海軍軍縮条約1930＝54歳

満州事変・・・1931＝55歳：「日本食品成分総覧」、

帝人疑獄事件1934＝58歳：日本栄養学会が組織され、念願の栄養学の独立を達成。「新選日本食品成分総覧」、

二二六事件・1936＝60歳：「調理食品成分照鑑」などを発表し、外国で行われた食品分析の模範ともなった。
日中戦争始・1937＝61歳：WHO主催会議の日本代表として、世界各国の国立栄養研究所の創設や栄養士の養成を提唱、決議される。
健保+総動員1938＝62歳：厚生省が新設され、栄養研究所の管轄が厚生省に移る。
第二次大戦始1939＝63歳：栄養研究所は厚生科学研究所国民栄養部となり、*退官。その後も、大森に移っていた栄養学校の研究室で
研究を続け、

日米開戦・・・1941＝65歳：

敗戦・・・1945＝69歳：

敗戦後、アメリカ式の栄養学が主流となってきたが、
極東裁判決・1948＝72歳：

独立回復・・・1951＝75歳：

栄養学は日本で生まれて世界に広がったという自負を持って、

なべ底不況・1957＝81歳：
美智子妃・・・1959＝83歳：栄養学一筋の生涯を終えた。

佐伯芳子「栄養学者佐伯矩伝」、インターネット、